

兵庫県における保育事業の歴史的考察

吉 森 恵

A Study of the History of Early Childhood Educational Services
in Hyogo Prefecture Focusing on the Meiji era

Megumi YOSHIMORI

In recent years the trend towards the nuclear family has been advancing, which presents great difficulties for working mothers today. Above all, raising children is the most serious problem. It becomes, then, one of the most important child welfare issues. In fact Japan has had a problem with childcare since its modernization started in the Meiji era.

The purpose here is to examine two points about the early childhood educational service in Hyogo Prefecture from a historical point of view. The first is why the early childhood educational service started. The second is how they cared children from the Meiji era to the Second World War. Particularly I focus on the Meiji era.

Key words : early childhood educational service, child welfare, Hyogo Prefecture, Meiji era
保育事業、児童福祉、兵庫県、明治期

1. はじめに

第二次世界大戦後、家族制度の崩壊や女性の権利意識によって、女性の社会進出が多くなってきたが、児童のいる世帯における母の仕事の有無別構成割合を『国民の福祉の動向2006年度』¹⁾によると、平成16年度では「母に仕事あり」は5割を超えている。また、核家族化へと変化する状態を判りやすくするため『同2003年度』²⁾掲載の図表に戻ってみると、平成14年度の世帯別構成では、核家族世帯は6割であり、その中で、夫婦（ひとり親）と未婚の子のみの世帯は、約4割を占めている。また、昭和50年から平成14年までの三世帯世帯の変化をみてみると、約2割から1割に減少している。これに対し、核家族世帯、単独世帯は増加の傾向が見られる。

このように核家族化が進行している時代にあって、

子どもを持つ女性が仕事を続けることは様々な困難が生まれる場合が多い。そして、その困難の最も大きなものは、子どもの養育であり、ここに保育の問題が重要な児童福祉問題の一つとして浮上してくるのである。こうした児童福祉問題対策として1994年に「エンゼルプラン」³⁾、そして、1999年には「新エンゼルプラン」が、大蔵、文部、厚生、労働、建設、自治の6大臣の合意によって保育事業の計画が指示された³⁾。両計画共に少子化対策が引き金になったが、児童福祉問題対策の一提案ともなっている。

なかでも、両計画が目指してきた保育サービスの点では、計画的に整備が進められているものの、保育所の整備・充実については、満足行くものではなく、課題が残されたままになっている。また、この計画の中で後に、推進された「待機児童ゼロ作戦」についても、まだまだ不十分である⁴⁾。このように、働く母親にとっ

て働きやすい環境が整えられつつあるとはいえ、延長保育や、病児保育はいまだ大きな課題となっている。

この働く女性の子どもの養育の問題は、今日だけでなく、日本が近代化する中で抱えてきた課題でもある。

そのため、本研究の目的は、兵庫県を対象に、その萌芽期でもある明治期 になされた保育事業が、どのような目的で生まれ、いかなる保育方法がとられていたかを探り、検討考察することにある。

まず、わが国における児童保護事業、兵庫県の産業の特性と社会事業について概括し、明治期の兵庫県の保育事業の導入とする。

2. 明治期の保育事業

1) わが国における明治期の児童保護事業

わが国における最初の児童福祉事業についてみると、推古天皇時代に聖徳太子が四天王寺に建立した悲田院であるとされている。これは特別に児童のみ対象としたものでなく、老若男女の区別なく、身寄りのない貧困者を混合収容保護したものである。

また、わが国の資本主義生産様式は、明治期に入っ て欧米諸外国よりもはるかに遅れて出発した。この先進諸外国との外交上、条約上の不平等などを克服するため、明治新政府は、「富国強兵、殖産興業、文明開化」の政策遂行を至上命令として、近代産業の保護、育成を図り、急速に日本の近代化を推し進めようとした。

こうした急激な政治的、社会的改革は、新たな多数の生活困窮者を出現させ、また、墮胎、棄児は明治政府の厳禁令にもかかわらず減少することはなかった。その後も、わが国初の救貧法である「恤救規則」が制定されたが、生活困窮者の問題は、一向に解決されること無く、中でも貧児対策は緊急を要していた。

この時代の児童保護事業は、貧弱ながら民間慈善団体の肩替わりによって行なわれ、そのほとんどが、キリスト教関係者もしくは、仏教関係者の手によるもので、数多くの保育施設、児童保護施設が生みだされた。しかも全国的に分布するという特徴をもっていた。

その代表例をまず社会事業の面から挙げると、

明治2年に日本近代史上初の社会事業で、当時日田県（現大分県日田市）知事であった松方正義同士の無償奉仕の孤児・貧窮児の収容施設、日田養育館が開設される。

明治7年、長崎浦上にキリスト教徒である岩永マキの主導する孤児対象の婦人同土育児所が開設される。

明治12年、東京の仏教慈善団体福田会が育児院を開設する。

明治20年、キリスト教徒の石井十次は、岡山孤児院

を開設。その後、十次は6年間学んだ医師の道を捨て、社会事業を我が使命の道とする。

明治22年に盲人福音会の米国婦人ドライバーが、あんま、はりなどを教える横浜訓盲学院を設立する。

明治24年、立教大学在学中にクリスチャンになった石井亮一がわが国初の精神薄弱児施設、滝乃川学園を開設する。

明治29年、医師でもあった佐竹音次郎は、医師を廃業して当時用いられていた「孤児院」という用語を良とせず、「保育園」という名で鎌倉保育園を開設した。

明治32年にはわが国の救護事業の先駆者といわれる留岡幸助がキリスト教精神を基本にした家庭学校を開設する。

保育事業に関しては、

明治10年にヘボン式ローマ字の創始者としても有名な米国人医師ヘボンによって、横浜に製茶工場女工のために保育施設が設けられたのが最初の保育事業である。

明治23年に新潟の赤沢鐘美、仲子夫妻が漢学塾の静修学校に塾生の抱える乳幼児を預かった新潟静修を始める。

明治27年に、大日本紡績工場内に労働婦人のための託児所が設置され、明治32年に京都、新潟、広島、徳島、静岡などの府県に児童福祉施設や児童施設が設けられる。

明治33年にはキリスト教の洗礼を受け、高等師範学校を卒業した後、女子高等師範学校の附属幼稚、華族女学校幼稚園部に勤務経験のある野口幽香らによって、四谷のスラム地帯に二葉幼稚園（保育所）が開立される。

その後も、児童福祉施設や託児所等が公立のものも交えながら開設されていった⁵⁾。

2) 兵庫県の産業の特性と社会事業

(1) 産業の特性

兵庫縣を大きく分けると、漁業を主な産業とする日本海側、農業を主とする中央山地地域及び淡路島、工業地帯を形成する瀬戸内海側となるが、明治初期には兵庫縣は、農業立県であった。この様相を変えたのが慶応3年の神戸港開港である。これは、また近代兵庫の始まりでもあった。この神戸港の整備に力を尽くしたのが、初代兵庫縣知事の伊藤博文であった。つまり、外国人居留地の整備、波止場の建設、県庁の兵庫から、坂本村（現神戸市中央区）への移転、県立病院の開設など次々と整備され、日本の表玄関としての体裁を整えていった。

そして、市街地の整備と平行して、貿易量もしい

に増加しているが、当初は、むしろ大阪川口地区に作られた居留地が重視され外国との取引は大阪のほうが多かった。しかし、明治7年、神戸・大阪間に鉄道が開通したのを機に、外国人の多くが、港湾の機能がすぐれ、進取の気風にあふれた神戸に移ってきた。そして、明治12年には、神戸の海外との取引高は、早くも日本全体の21%に達した。明治20年ごろまでのおもな輸入品は、綿織物・毛織物をはじめとする繊維製品で、輸出品は茶・生糸・海産物であった。そのころの神戸の貿易は、直接輸出入するのではなく、居留地の外国商館を通して行われた。このため海外の情報にうとい日本の商人は、不利な取引を強いられることが多かった。

明治20年ごろになると、関西に紡績業がさかんになり始めた。これは明治16年に創業した大阪紡績の成功に刺激された結果であった。兵庫県下では明治22年に尼崎紡績が、29年には播磨紡績があいついで創業し、前々年度の明治27年には鐘淵紡績が神戸に進出してきた。

これらの紡績工場の原料購入と、生産した綿糸輸出の基地となったのが、大型船舶の出入りに便利な神戸港であった。

また、明治22年には兼松房二郎が、オーストラリアから原毛の買付けに成功し、川西清兵衛が日本毛織会社を創設するなど、神戸は羊毛と毛織物にも関係をもつようになった。

こうした神戸港の発展と海外貿易の伸長に刺激されて、県下各地では、近代工業が起って来た。

主体的役割を担った神戸では、明治の初年からマッチ・石鹼・洋紙などの製造が行われていたが、とくにマッチは中国への有力な輸出産業にまで成長した。紡績業の発展は製造業・造船業・製鉄業も盛んにし、川崎造船所・神戸三菱造船所・神戸製鉄所などがあいついで開業した。

造船業の発展によって鉄鋼の需要が増え、明治37年、脇浜に小林製鋼所ができた。しかし、生産にたまずき、翌年鈴木商店に買収され神戸製鉄所として再出発した⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

これらの産業の特性すなわち産業構造の変化がこれから述べる社会事業、保育事業に多大な影響を与えるのである。

(2) 社会事業

このように、神戸開港とともに神戸を中心として急激な工業化及び都市化が進行するが、他方救済対象者も街にあふれる状態が生まれた。その、救済対策としての社会事業は、神戸を中心に施設保護の拡充へと発

展していった。さらに、欧米の近代的慈善事業、社会事業が外国人によりもたらされ、その影響も強く受けて神戸の社会事業は追々に足取りを速めていったのである。

その創始者と事業所を年代別に並べると、

明治10年にフランス人修道女H・W・アントニンが神戸天主堂の事業を継承し、「女子教育院」を設立。当時市内に多かった棄児、迷児の収容にあたった。当然のことながら、乳幼児は孤児院に頼んで保護されたが、これが兵庫県における孤児院の始まりである。

明治17年には、外国崇拜思想に対抗し、修養団体が組織され、その一部会員が「神戸報国義会」を結成。市内の孤児、棄児迷児、貧困家庭の児童の収容保護を開始する。

明治23年、語学と医学を修めた小橋勝之助が赤穂郡矢野村に孤児収容の博愛社を設立。石井十次と提携したが志半ばにして29歳の若さで亡くなった。

同明治23年、吉川亀、飯田勇、横田勝などのキリスト教牧師や信者により、「神戸貧民救済義会」が設立され授産事業を始める。

明治25年にこれを「神戸孤児院」と改称し本格的な児童の収容保護事業をすることとなり、矢野毅がこれに専念した。

明治31年、村松浅四郎が出獄者保護会を創立し、神戸市荒田町に神戸愛隣館を設立する。出獄者の更生保護に当たった。後、養護施設となる。

明治32年、寺島信恵は友愛看護婦会を起こし、友愛養老院を神戸市中山手通りに設立する。後、神戸養老院と改名。兵庫県初の養老事業となる。

明治33年、尼崎に琴浦育児院が設立される。児童の収容擁護にあたる。

明治34年、軍人遺族を援護するため石井治之助が播磨慈善会育児院を設立する。

明治38年、視覚障害者の教育と保護のため、神戸訓盲院が左近丞考之進によって神戸市再度筋に設立される。後、今関秀雄が継承し盲人後援会と称した。

明治42年、賀川豊彦が神戸市新川地区のスラム街に入り社会事業活動を始める⁹⁾¹⁰⁾。

3) 兵庫県の保育事業

(1) 保育事業の流れ

産業構造の変化に伴い街にあふれ出した救済対象者の中には、社会事業による施設保護を受けない多くの子どもたちが含まれていた。この子どもたちに手を差し伸べようとしたのが兵庫県の保育事業の始まりである。

明治19年に間人(はしうど)たね子が二ツ茶屋村(現

神戸市中央区元町通り)に「間人幼児保育場」を設立する。これが県下における幼児保育の最初と言われる。

明治22年エドウィン・ベイカーは、姫路中学校の英語教師に招かれ着任。彼の居住地(五軒邸)に自宅を開放し、経費は彼が支払い、近くの子どもたちを預かることになった。後、「ベイカー幼稚園」と称す。

同明治22年に米国の宣教師でシカゴの幼稚園教育に9年間従事し、幼児教育の研究を重ねていたA・L・ハウが、保母養成機関「頌栄保母伝習所」(現神戸市中央区中山手通)を創設、その経営にあたった。

明治28年、米国の宣教師R・A・トムソンが小野浜(現神戸市中央区小野浜町)の民家の作業所で初めての幼稚園「善隣幼稚園」を開いた。ハウは、ここへも多くの卒業生を送っている。

明治36年、鐘ヶ淵紡績兵庫工場が、試験的に保育舎を設け、保育に当たる。これが県下で初めての企業内保育である。

明治37年、日露戦争を契機に、後に戦時保育所と改名された児童保管所が設けられた。この児童保管所は現在の保育所に比べても遜色の無いものであった。

明治42年、氷上郡柏原町の小学校に子守教育所が設けられる¹¹⁾。

(2) 保育事業の創始者

次に、これらの代表的な創始者と事業の要約について述べる。

間人たね子

間人たね子が、幼児保育の始まりと言われる「間人幼児保育場」を設立した地域には、多くの貧困者層が移住し、児童は家族において重要な労働力としての地位を占めていた。すなわち、両親が外で働き、弟妹の面倒をみなければならぬ児童が多く、幼い弟妹を背負って通学する子どもも多くいた。たね子は、こうした児童のために、明治10年ごろより幼い子どもを便宜的に預かって保育を始めたが、この経験を生かして幼児に専門的教育を実施することを決意し、明治19年に「間人幼児保育場」を開設し、明治23年に名称を、「間人幼稚園」と改称し保育に当たった。

間人は保育事業において、広く門戸を開き、月謝も決めていたが負担能力に応じて保護者の任意とし、そのために生じた不足は間人が私費をもってあてたが、このことは、特記に値する。

間人幼稚園は明治期には先駆的役割を果たしたが、その後大正期に入ると幼稚園数も大幅にふえ、幼稚園的な機能と保育所的機能を持合せようとした同園は、徐々に園児も減少し、たね子の老齢とも重なって、大正10年たね子74歳で他界と同時に間人幼稚園は30年

にわたる保育事業の幕を閉じたのである¹²⁾。

トムソン夫人

「善隣幼稚園」を開設したR・A・トムソン夫人は、アメリカで保育を専攻し、アメリカ博愛主義的幼稚園運動の影響を強く受けた人である。神戸に明治22年に来て伝導活動を続けるなかで、小野地区の幼い子どもたちが、日中放置され、しかも危険な工場付近で遊んでいる光景を目にし、この子らのために幼稚園を開こうと決意。明治27年に2階建ての民家を借り受け、子どもたちを集めて保育を始める。

そして、翌明治28年には、これを正式な幼稚園としてスタートさせたのである。時は恰も日清戦争の最中で、全国民が勝利へと驀進しているときであった。

園の経営は、パプテストミッションの援助でなされていたが、教材費は保育料と有志の献金やトムソン夫人の私費などでまかなわれていた。

当時は、幼稚園教育についての一般の理解も乏しく、保護者には子どもの保育について考える余裕もなかった。ただ、子どもの世話をしてくれる外人さんがいるという程度の感覚で、赤ん坊を背負ってくる子どもたちも多かった。そのため、乳児は看護婦経験をもつ保母に専門的に保育させることになった。今日乳児院の設置基準に看護師を置かなくてはならないことを思う時、トムソン夫人は極めて近代的な保育観をもっていたといえる。こうした状況を見て、次第に地区の人々の理解も得られ、入園希望者は増加していったのである。明治32年に善隣幼稚園は、アメリカのパプテスト協会の援助で三宮の近くに場所を移転し、2階建ての新園舎を建設した。新築すると同時に、文部省が同年に定めた幼稚園規定に準じ、定員60名の「善隣幼稚園」として認可を受け、再出発したのである。

それと同時に、入園児に変化が生じたのである。三宮近くにある園は、商店街の子どもたちで占められるようになり、当時対象としたスラム街の子どもたちは次第に遠退いていった。この状況に心を痛めたトムソン夫人は、明治42年再び元の場所に100名を収容できる新園舎を建て移転した。こうして、スラム街の子どもたちも再び入園するようになった。しかし、幼稚園は一日4時間保育を原則としているため、午前中で終わる保育ではとてもこの地区の保育希望は満たされないものであった。こうして、明治44年28名の幼児を預かり午後部をスタートし、いわゆる二部保育をスタートさせたのである。まさに、この地域の実情(ニーズ)にあわせたもので、幼稚園としては画期的な保育事業といえることができる。

カリキュラムは、午前、午後ともほぼ同じ内容であっ

たが、午後の部は特に保健衛生などに力を入れたという。

善隣はその名のごとく、善き隣人であることを願って設立された園である。幼児教育だけに専念するのではなく、地域社会への働きかけという大きな役割をも担っていた。つまり、地域の施設として住民と深く結びついており、今日でいうコミュニティワークを行ったとみられる。

しかし、明治・大正と順調に発展をしてきた善隣幼稚園も、トムソン夫人の老齢化、施設移転、そして、ミッションとの関係などで困難な事態が生じ、ついに昭和8年、ミッションは宣教師を帰国させ援助も打ち切った。従って理事会は午後の部を廃止することで困難を切り抜ける決定をし、一方、午前部は、葺合バプテスト教会附属幼稚園として葺合区(現中央区)に移転、再出発し、現在に至っている。

午後の部は、その後、賀川豊彦の経営するイエス団に無償譲渡され、昭和10年から「友愛幼児園」として保育所を続け現在に至っている。

明治27年から昭和9年までの40年間にわたり「善隣幼稚園」としてスラムの子どもたちと共にユニークな活動を続けた善隣幼稚園は一方は幼稚園、一方は保育所へとそれぞれの道を歩むことになったのである¹³⁾。

エドウィン・ベイカー

明治22年エドウィン・ベイカーは、姫路中学校の英語教師に招かれ着任した。彼の居住地(五軒邸)近くの長屋には子沢山の家庭が多く、暮らしに追われながらも互いに助けあひながら生活している様子を知る。しかし、この子どもたちが足手まといになって、親たちが働きたくても、働けないで困っていることもわかってくる。そこで、彼は親が仕事に行っている間、自宅を開放し、子どもを預かろうと考え、経費は彼が支払い子どもの世話人については、彼が通う教会の牧師に相談することにした。その結果、信者の一人でありその後彼の妻となった岡田トリを紹介され、長屋の子どもたちを預かることになった。集ってきた子どもは、ほとんどが職人が日雇い人夫の子弟であり、約20人を早朝から夕方遅くまで世話をした。この保育事業は明治22年の立秋から開始されたのである。

しかし、保育事業が軌道に乗ってきた頃、家主をはじめとする隣近所から、子どもを預かることへの理解が得られず苦情が出はじめたのである。それを機に近くに250坪の屋敷を買い求め新築し直すことにした。その後、新しい環境でトリとトリの妹が子どもたちの保育にあたることになった。

明治27年、日清戦争がおこり、28年に入ると戦火は

一段と拡大し、政府も軍事費以外はすべて厳しく節約を強要してきた。従って兵庫県でも教育費等の予算が節減され、高級取りのペイカーもその整理の対象となり、28年3月をもって中学校の教師を退職することになった。

退職したペイカーは、毎日子どもたちの世話に明け暮れる日々を送っていたが、市役所の吏員が訪ねてきて幼稚園を開設してはどうかと話を持ち込んできたのである。トリは早速各地の幼稚園を見学し、そのために必要な施設・調度を整え、新しいオルガン、遊具も買い求め、町内の有力者にも協力を求めて幼稚園を開設したのである。その名も「ペイカ幼稚園」とし、毎月の保育料も決めたのである。ペイカーが、無料で長屋の子どもたちを保育し始めてから6年目のことであった。

ペイカーは、昭和8年80歳で世界したが熱心なクリスチャンであり、社会事業家であった。その後経営者も代わり、第二次大戦後はペイカ保育園として出発し、現在に至っている。ペイカーは、兵庫県における保育事業を開始した先駆者の一人である¹⁴⁾¹⁵⁾。

(3) 保母養成機関 頌栄保母伝習所

「頌栄保母伝習所」の創設者であるA・L・ハウは、神戸基督教会(現日本基督教団神戸教会)の婦人会有志による幼稚園設立に際し、保育の専門家としての要請を受けアメリカン・ボードの教育宣教師として明治20年35才の時日本へ派遣された。

ハウは、1869年ロックフォード女子専門学校で2年間の音楽科課程を終えた後、1878年シカゴ・フレール協会保母伝習学校の2年課程を卒業し、シカゴで9年間幼稚園教育に携わったことのある経歴の持ち主であった。彼女は婦人会有志による幼稚園設立に参画する中、保母の養成が、急務であると考えようになり、幼稚園と同時に保母伝習所の創設にとりかかった。明治22年10月に頌栄保母伝習所、11月に頌栄幼稚園が開設された。

ハウは、キリスト教徒として「頌栄幼稚園」にキリスト教精神をひろめ、フレール精神による保育を行ったが、当時、保母伝習生に教える教科書も園児に歌わせる唱歌もなかったため、保育の指針、教材が少ない当時において、日本語によって諸文献の紹介にとめたが、それは、頌栄幼稚園の幼児教育に資するばかりでなく、兵庫県下はもちろん日本の幼児教育の先駆的な貢献ともなった。

ハウ自身もこれらの出版をフレール教育の使徒としてその幼児教育思想の普及のためにも広く刊行を意図したと考えられる。さらに、明治39年、ハウは、フ

レーベル精神による保育実現のため、日本における最初の幼稚園教育者の団体「基督教日本幼稚園連盟」を組織したのである。その後、ハウは、保母伝習所をこれまでの2年制から幼稚園教育課程の4年制の独立養成機関としている。

ハウは、幼児教育の先駆者というだけでなく、明治期のキリスト教布教活動が、むしろ社会事業を主とした生活困窮者の救済につとめたように、保母伝習生たちにもキリスト教の愛の教えとは、このような孤児などに対する援助、協力であることを教えた。ハウは、明治20年来日し、昭和2年74歳で帰米するまでの40年間の長期にわたり、県下の幼児教育、保母（保育士）養成に努め、各保育所へ多くの卒業生を送り出し、近代的な保育事業の推進に尽力した^{16) 17)}。

(4) 企業内保育所の誕生

わが国における企業による保育所第1号は、明治27年大日本紡績が東京で開設したのが始まりといわれる。兵庫県では、明治36年鐘ヶ淵紡績兵庫工場が、神戸の地で試験的に社宅2戸を保育舎として設け、保育を行ったのが始まりといわれる。

当時紡績女工の勤続年数は平均1年半に過ぎず生産性は上がらなかった。そのため、熟練女子労働者の確保が迫られ、彼女らが結婚して子どもができて勤められるように、乳幼児を預かってくれる施設が必要であった。

当工場の保育施設では、乳幼児28名を収容し、乳母2名が保育にあたった。保育料は無料であったが、専門職として保母をあてての保育ではなく、子どもたちを集めての子守程度であった。当時の保育舎のありようをみると、部屋にいくつかのハンモックがついてあって、乳児を寝かせ、泣くと、それをゆずってあやしたといわれている。オルガンや遊具やおもちゃ類もほとんどなく、わずかに数冊の絵本があった程度である。つまり、子どもを自由に遊ばせて、怪我のないように見守っているという保育状況ではあったが、従業員からは、この企業内保育があるため、子どもを預けながら安心して仕事ができると感謝されていた。

しかし、大正期になり企業内保育所以外に多くの保育施設が開設され充実されてくるにつれ、企業内保育所の保育内容も随分改善されていった^{18) 19)}。

明治38年鐘紡は、保育施設を鐘紡兵庫幼稚園とし、地域の子どもたちにも開放したが、昭和初期には、廃園となった。鐘紡に続いて県下のマッチ工場でも同様の企業内保育を手掛けたが、マッチ業界の衰退とともに消えていった¹⁸⁾。

上述したように、企業内保育事業は女性の労働力確

保のためのものであり、従って企業の衰退によって消失する運命にあったと言える。

(5) 戦時保育所

日露戦争の時期、神戸で、約5,000人の男性が出征し、働き手を失った家族の中には、その日の生活に困り公共の保護に頼るものが多かったと言われる。神戸市では、これに要する費用が1ヶ月で数千円に達し、その救護事業の維持は困難となった。その実状は、老齢・病気のため働けない人もあったが、乳幼児をかかえているために働けない母親が意外に多いことが判明した。

その対策として、後に戦時保育所と改名された児童保管所が設けられた。

神戸の戦時保育所が、日本の保育史上見逃せない足跡を残したのは、生江孝之の構想と実行力に負うところが多かったといわれる。生江孝之は、明治、大正、昭和の3代にわたって活躍し、我が国社会事業の父とも言える人である。生江は、仙台に生まれ、青山学院で神学を、ボストン大学で社会学、宗教学を学び、欧米の社会事業を視察した後、明治37年に帰国、神戸市の外事係長になった。そして、神戸婦人奉公会の囑託となり、戦時保育所設置の相談にあたったのである。

生江は社会事業の専門指導者であったが、保育事業に対しては、特に深い関心をもち真剣に取り組んだのである。神戸婦人奉公会は、生江の指導の下、出征軍人家族の児童を保護するため、明治37年葦合区小野にある八幡神社境内と生田区にある仏通寺別院の2カ所に保育所を開き、これを「児童保管所」といった。このような戦時保育所を設けたのは神戸が初めてではなかったが、神戸の児童保管所は、内容においても非常に充実し、今日の保育所と比べても少しも遜色のない立派なものであったため、内務省からも全国類のない優れた模範施設として推薦され、各地から相次いで人々が視察や調査に訪れている。

また、保管所という名は物品の保管のように連想されるので、間もなく保育所に改められたのである。申込者は急激に増加し、さらに保育施設を増設しなければならなかった。同年9月に兵庫区に薬仙寺保育所、翌年兵庫区に八王寺保育所、生田区に宇治野保育所を開いた。さらに神戸婦人奉公会施設の授産場へ通勤する人々のために同年兵庫区、葦合区とそれぞれ簡易保育所を設けた。仏通寺保育所は申し込みが多く狭くなったので、明治37年に楠神社の境内にある神戸市在郷軍人会本部へ移り、名前を楠社児童保育所と改めた。

日露戦争後、戦時保育所の事業は、財団法人「戦役記念保育会」が結成され、引き継がれることになった。

神戸の戦時保育所の特色を挙げると、まず、保育要

員が十分であったことである。例えば、八幡児童保育所で園児36人に対し、主任1名、助手2名、炊事婦1名でその他の保育所も同様であった。次に、委員会制度によって民主的に円滑に保育園の運営がすすめられ、多くの地域の協力を得ることができたこと。更に、当時の保育所概則には収容すべき児童は7歳までとなっていたが、学童保育、夜間保育も行うなど多様な保育の要望に答えるとともに、保母が家庭訪問をし、保育、生活面の指導は家庭にまで徹底されたこと。また、生江は、乳幼児以外の児童に対しては、教育を施すことがきわめて大切であると保育所に於ける教育の重要性を力説した。そのため、戦時保育所の保母は専門教育を受けていなかったが、近隣の幼稚園の教諭や小学校の教師が喜んで援助し、その不足分を補ったこと。一方、登園して来る児童は、入浴させ、備え付けの衣服に着替えさせて、着てきた衣服は洗濯して持ち帰らす。早朝から来る児童には、3回、一般の児童には2回の給食を与え、乳児には牛乳または、コンデンスミルクが発育の状態に応じて調乳され与えられた。また、篤志家の医師が健康診断にあたるなどして保健、衛生面でも力を入れたことなどである。

神戸の戦時保育所がこのように大きな成果を納めたのは、生江の懇切な指導と銃後を守らんとする婦人奉公会のメンバーの熱心な後援によるものであるが、それとともに保母の献身的な奉仕の賜であった。これらが一体となって働き立派な成果を上げたのである²⁰⁾²¹⁾。

(6) 子守学校から保育所へ

政府は、明治5年に「学制」を公布しすべての国民に教育の義務を課したが、一般には十分な理解を得ることができなかった。就学率も49%と半分にも満たず、その対策の一つとして子守学校が生まれた。これは、幼い弟・妹の面倒をみる子どもたちの登校を促すため子どもたちが連れてくる幼子の面倒を見る保育者養成を行うものである。この子守と呼ばれた子どもたちは就学が非常に困難であったが、普通教育の機会を与えるとともに乳幼児の保育方法を教えることを目指し、子守学校というわが国独自の教育機関が開かれたのである。

兵庫県では、子守学校として明治42年、氷上郡柏原町の小学校に子守教育所を設け、子守が連れてくる幼児に玩具を与え保育をしたのが始まりである。

これはまた、農村部における最も組織的な保育所の始まりでもあった。しかし、入所人数が多くなり、運営も困難になったので、保育料月額15銭を徴収して保育を継続したが、その後、これを町に移管し町立崇広幼稚園となった²²⁾。

3. まとめ

わが国における明治期の児童保護事業と兵庫県の産業と社会事業について概括し、兵庫県の保育事業について述べてきたが、兵庫県は明治期になると、神戸港の開港により、急激な都市化の進行がみられ、それに伴って社会問題が発生し、救済対象者が街にあふれる状態となった。また、乳幼児で孤児になった子どもも多くおり、社会事業は、神戸を中心に施設保護が進展していった。

地域により、多くの貧困者層が居住し、児童は家庭において重要な労働力としての地位を占めていた。つまり、両親が外で働くため、弟妹の面倒をみなければならぬ児童が多く、幼い弟妹を背負って通学する子どもたちも少なからずみられた。こうした事情などもあって、幼い子どもたちに対する幼児保育が生まれた。

即ち明治期の兵庫の保育事業は、神戸港の開港による急激な都市化進行の過程で生じた社会問題への対応策として発展した。

この対応策としての保育事業に中心的役割を果たしたのは、海外より送り込まれてきたキリスト教の宣教師ないし日本のキリスト教徒たちであった。

キリスト教徒でないが間人たね子、クリスチャンであるがアメリカンボードの教育宣教師として支援をうけながら保育事業に取り組んだのではないエドウィン・ベイカー、「善隣幼稚園」を開いたバプテストミッションの宣教師としてのR・A・トムソン夫人などそれぞれが幼児教育の創始者として、子どもたちの幸せを願って献身的にその道を切り開いてきたことは、ともすると現在の幼児教育が見失いかけているものに警鐘をならすものとして、大きな意味合いをもっているのではないだろうか。ここに保育者の原点がある思いがする。

保母養成機関「頌栄保母伝習所」の創設者であるアメリカンボードの教育宣教師としてのA・L・ハウの幼児教育に対して果たした役割は大変大きいものがあった。保母伝習生に教える教科書も園児に歌わせる唱歌もなく、保育の指針、教材が少ない当時あって、自ら教材を作成するだけでなく、日本語によって諸文献の紹介につとめたことは、頌栄幼稚園の幼児教育に資するばかりでなく、兵庫県下はもちろん日本の幼児教育の先駆的な貢献ともなった。

上記のような篤志家による保育事業に対し企業、官による事業では、企業内保育所が女性の労働力確保を目的に開設されたが、企業の衰退によって消失せざるを得なかった。

神戸市の戦時保育所は全国でも有数の充実した内容をもち、日本の保育史上で大きな影響を与えるものとなった。これは日本の社会事業の父とも言われる生江孝之という優れたリーダーとそれを支援する婦人奉公会、直接保育に当たる献身的な保母、これら三者のチームワークのよさがこの保育事業を成功させたと思われる。

一方、保育者養成という面では、学制公布に伴う子守学校を設けたことが、就学が非常に困難な子ども達にもその機会を与えることができ、義務教育の初期段階ではよき案であったと思われる。

4 . 結 語

今日、有子女性の常勤勤労者が増加するにつれ保育問題が益々大きな児童福祉の問題となっており、子どものニーズよりも母親のニーズに基づいて、保育施設を、そして保育内容が考えられているように見受けられるが、明治期においては、どちらかと云えば母親の労働のために放任されている子どものニーズに応えて生まれた保育施設が多い。このことは、今日の保育従事者や、行政側の考え方に意味ある示唆を与えてくれる。

子どもにとって一番大切なものは何か、子育て支援は、親支援でもあり、これだけ核家族化が進んできている現状を考えると、明治期の先人達が行った保育事業の情熱を今一度考えるべきではないだろうか。

この度は、兵庫県の明治期における保育事業の概略を俯瞰してきたが、個々のテーマについては、今後更に検討していきたい。また、兵庫県内の大正期から第二次世界大戦終了までの保育事業の概略についてもみていきたい。

<参考文献>

- 1)厚生統計協会：国民の福祉の動向2006年第53巻第12号 6-7, 厚生統計協会, 東京, 2006
- 2)厚生統計協会：国民の福祉の動向2003年第50巻第2号, 17, 厚生統計協会, 東京, 2003
- 3)厚生統計協会：国民の福祉の動向2006年第53巻第12号 6-7, 厚生統計協会, 東京, 2006
- 4)新版・社会福祉学習双書編集委員会：新版・社会福祉学習双書2007第4巻児童福祉論, 270, 全国社会福祉協議会, 東京, 2007
- 5)坂田澄：わが国の児童福祉の歩み, 112-117, 高文堂, 東京, 1995
- 6)兵庫県：ふるさと兵庫の歴史, 76-87, 兵庫県文化協会, 兵庫, 1981
- 7)落合重信：増訂神戸の歴史 - 古代から近代まで - 通史編, 150-195, 後藤書店, 兵庫, 1989
- 8)今井修平, 小林基伸, 鈴木正幸, 野田泰三, 福島好和, 三浦俊明, 元木泰雄：兵庫県の歴史県史28, 283-286, 山川出版, 東京, 2004
- 9)新修神戸市史 行政編 くらしと行政, 4-9, 新修神戸市編集委員会, 2002
- 10)湯川台平：社会事業夜話, 16-29, 兵庫県社会福祉協議会, 兵庫, 1964
- 11)第24回全国私立保育園研究大会実行委員会：保育の先覚者たち - 人物でつづる兵庫・神戸の保育史 -, 4-11, 兵庫県保育所連盟, 兵庫, 1981
- 12)松田薫：兵庫県保育所の歩み, 6-7, 兵庫県保育所連盟編, 兵庫, 1979
- 13)村山盛嗣：神戸の保育園史, 30-33, 神戸保育園連盟, 兵庫, 1977
- 14)松田薫：兵庫県保育所の歩み, 7-9, 兵庫県保育所連盟編, 兵庫, 1979
- 15)ベイカ保育園：ベイカ保育園創立100周年記念誌, 白鷺印刷, 兵庫, 1989
- 16)今井鎮雄：幼児教育の歴史的展望と将来への視座 頌栄短期大学研究紀要 Vol.22 1-2, 1990
- 17)高野勝夫：エ・エル・ハウ女史の日本保育史への貢献 - 保育者養成の先駆者, 先駆者としての貢献 - 頌栄短期大学研究紀要 Vol.6 29-39, 1974
- 18)松田薫：兵庫県保育所の歩み, 兵庫県保育所連盟編, 13-14, 兵庫, 1979
- 19)村山盛嗣：神戸の保育園史, 神戸保育園連盟, 50-54, 兵庫, 1977
- 20)同上書 55-68
- 21)松田薫：兵庫県保育所の歩み, 兵庫県保育所連盟編, 15-21, 兵庫, 1979
- 22)同上書 14-15